

まえがき

この度、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XX)を刊行する運びとなりました。刊行にご協力頂いた関係各位に深く感謝致します。

本報告書は、平成 21 年 1 月 15-16 日の両日に開催された第 21 回名古屋大学年代測定総合研究センターシンポジウムの内容と、本年度における年代測定に関する学内共同教育・研究の成果をまとめたものです。

本年度の前半は、一昨年前の 2007 年 11 月に開始された古川記念館の耐震工事の継続により、タンデトロン加速器質量分析計および CHIME 年代測定装置が完全停止を余儀なくされ、さらに 2008 年 3 月末の工事終了後も、装置の立ち上げに長い日数を要し、年代測定が思うように進まず、共同利用実験を十分には推進できませんでした。耐震工事期間中は、わずかに、第 1 実験室における試料調製が可能な状態でした。このような状況にもかかわらず、第 21 回目にあたるシンポジウムは、特別講演 3 件、年代測定装置の現状報告 2 件、研究機関研究員の研究成果報告 2 件、一般講演 14 件とほぼ例年同様、密度の高い内容でした。また、本業績報告書も、多岐に亘る分野から充実した研究成果を寄稿して頂きました。これらの内容は、いずれきちんとした学術雑誌に掲載されるものと期待します。

さて、法人化後の今日では、それぞれの部局において多方面に亘る成果・実績が求められています。当センターに所属する研究者自身の研究成果は勿論のこと、学内共同利用教育研究センターとしての成果・実績、また、研究成果を社会に還元する社会貢献が求められています。学内共同利用教育研究への貢献としては、昨年からは、試料調製システムの予約状況をウェブから確認でき、さらにウェブから予約可能なシステムが利用できるようになりました。このような改善により、共同利用の推進、そして実績の向上が達成できれば有り難く存じます。

平成 21 年 2 月には、日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）の援助を受けて、オーストラリアの核科学技術研究機構（Australian Nuclear Science & Technology Organization: ANSTO）の Dr. Minh Quan HUA を名古屋大学へ招へいし、共同研究を推進することができました。また、ドイツ、中国やオーストラリアの研究者を名古屋大学へ招待し、講演や討論をお願いしています。このような外国人研究者との交流は、研究の今後の発展には欠かせません。

平成 12 年度に発足した年代測定総合研究センターは、来る 4 月から 9 年目に入ります。今後とも、新たな年代測定法の開発研究や必要な装置の改良研究を推進し、さらに次世代の年代学研究を担う若手研究者を育成することにより、センターの存在意義を学内外に明示して行く必要があります。世界トップレベルの年代研究と年代教育を推進する年代測定総合研究センターとなるために、関係各位のなお一層のご支援・ご協力をお願い致します。

名古屋大学年代測定総合研究センター長
中村俊夫